

受講番号 18064 学校名 伊野中学校 氏名 畠山 裕世

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年1組 生徒数 39 名
科目名 1年 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW CROWN English Series 1

クラスの様子・特徴

明るく元気で男女の仲もよい。素直で人懐っこい生徒が多い。授業中わくわくするという意欲がとても高く、班内での協力や教えあいもよくできる。その反面基礎学力や理解力に差があり、一斉授業では十分に対応しきれない部分もある。

問題の確定

「聞く」「話す」活動には意欲的であるが、「読む」「書く」活動にはあまり積極性が見られない。

予備調査

A 授業の観察

音読練習や会話練習の際、自信のない単語に読み仮名を書く生徒が多く、発音や発話がほとんどがカタカナになってしまい英語らしい発音からは大きくかけ離れている。また英語を音読することすら難しく努力をする前にあきらめてしまう生徒もいる。

B 生徒による授業評価

ほとんどの生徒が英語の授業を「楽しい」と感じている反面、「難しい」と感じている生徒も多かった。特に「教科書の単語で読めないものがある」という生徒が少なく、活動の幅を広げすぎて教科書を扱う時間が少なかったことを考えさせられる結果になった。

C 学力データ

「聞く」「話す」活動においては大変意欲的に取り組み、定期テストでの到達度も高かったのに対し、「読む」「書く」活動にはあまり積極性が見られず定期テストでも到達度が低かった。

リサーチ・クエスチョン

「読む」活動を苦手とする生徒の多い学習集団において、上質のReading Abilityを習得させるために一斉授業における効果的なアプローチは何で、どのくらい生徒のReading Abilityが向上するか。

仮説・実践・検証

仮説1

フォニックスを導入し、音と文字との連結を意識しながら単語を学習することで、つづりと発音との関係に興味を持ち、意欲的に学習しようとする態度とReading Skillsの習得が効果的に向上するだろう。

実践1

フォニックス指導。最初はアルファベットカードを用いて基本的な発音を指導。その後継続して練習や小テストを行った。学習した内容を用いてスペリングテストを実施。後半ではそれまでの指導を発展させ音字の連結を扱った。評価は音読テストで行い、期間中3回実施して変化を記録した。

検証1

フォニックスを扱うことによる英語力への波及を目標として取り上げたが、音読の表現力に対しての即効性はあまり期待できるものではなかった。しかし一方で文字と発音の関係に興味を持つ生徒が確実に増加し、学習に対する意識の変化が見られた。生徒たちは未習のページでもある程度は音読できるようになったことに喜びを感じ、さらに意欲を持って音読に取り組むようになってきた。

仮説2

弾丸インプットによる単語の習得からフレーズの習得へと発展させることで、音の吸収を理解し、リズムをもった音読ができるようになるだろう。

実践2

教科書本文の音読練習をする際、CDでのシャドーイングを行った。難しい箇所は音の吸収が起きていることを説明した。その後別の教材でもシャドーイングに取り組み、その中で音の吸収を探させてみたが、楽しく取り組む姿がよく見られた。フレーズインプットを配布。1枚目は前置詞句を中心としたインプット。後半に行った2枚目は動詞と目的語の連結を目標とした。

検証2

継続した取り組みを通じて、生徒たちは生徒はALTのsmall talkを聞いたときにWhere is ~?で[ri]の発音が起こることに気づいたり、その他の活動においても応用しようとしていたりするなど、少しずつ変化が現れてきた。音読もフレーズのまとまりを単位として読む姿勢が育ってきた。一方音読自体が難しいという生徒への対処にまではいたっていない。

仮説3

スラッシュつきReadingを導入することで、意味のまとまりを1つの単位として音読しようとする意識が高まり、音読練習の時間が単なるReputationから脱出し、ReadingからSpeakingへの発展が期待できるだろう。

実践3

教科書本文の音読練習の際、スラッシュを入れて読む時間を確保した。フレーズで意味が生まれてくることもあわせて指導した。会話練習の際も最初はスラッシュをつけて練習させ、活動の発展・統合を目指した。後半はスラッシュをこちらが指定してつけるのではなく生徒にまかせ、意味のまとまりで区切って音読するという活動を取り入れた。評価は音読テストで行い、期間中3回実施して変化を記録した。

検証3

音読テストの結果からも全体的に上達を実感でき、特にフレーズのまとまりで読むという目標はかなり達成されたと考えられる。音読だけでなくスキット発表などの話す活動においても意味のまとまりとしてフレーズを大事にしながら話す生徒が増えてきた。会話テストでも1学期に比べて発音やリズムを気にしながら応答しようという意識がよく見られ、波及効果が見られた。

研究の成果

仮説1～3を実践する中で、生徒の音読に対する意欲は向上し、表現の技術も飛躍的に向上した。特に「前に教科書でまだやっていないところを読もうとしたら全然わからなかったけど読めるようになった」「英語の発音もよくなったし読めるようになった」という生徒の感想も多数見られ、生徒自身の自信にもつながったことがわかる。仮説1で行ったフォニックスによる音声指導の効果が特に大きく、計3回実施した音読テストの成績の変化にもそれはよく現れている。またフレーズを1つの単位として音読する姿勢が育ったことが話す活動にも波及した。

今後の授業改善の課題

授業評価システムの集計結果を見ると、音読テストのために練習したという生徒は少なく、授業内の音読練習だけでテストに臨む場合がほとんどだということに気がついた。そのため授業での音読練習の質の向上と量の確保、あわせて家庭での音読練習の習慣化が今後の課題としてあげられる。また生徒からも「フォニックスをもっとやってほしい」という感想もあり、今後継続して取り組んでいきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-892-1351

電子メール